第1章

日野町の概要

1. 自然・地理環境

2. 社会環境

3. 日野町の歴史的変遷

第1章. 日野町の概要

1. 自然・地理環境

(1)位置・面積

当町は、滋賀県の南東部、湖東地方の南端に位置しており、町域は東西 14.5km、南北 12.3km で、総面積は 117.60 ㎢と滋賀県全体の３％を占めています。町域の50％は山地や丘陵であり、北は布引丘陵を挟み東近江市と、南は日野・水口丘陵を挟み甲賀市と接しています。

当町の 50km 圏内に京都市、100km 圏内には大阪市及び名古屋市等が所在し、高速道路を介して京阪神・中京圏へ１時間程度で到達することができます。

広域図

位置図

(2)地形

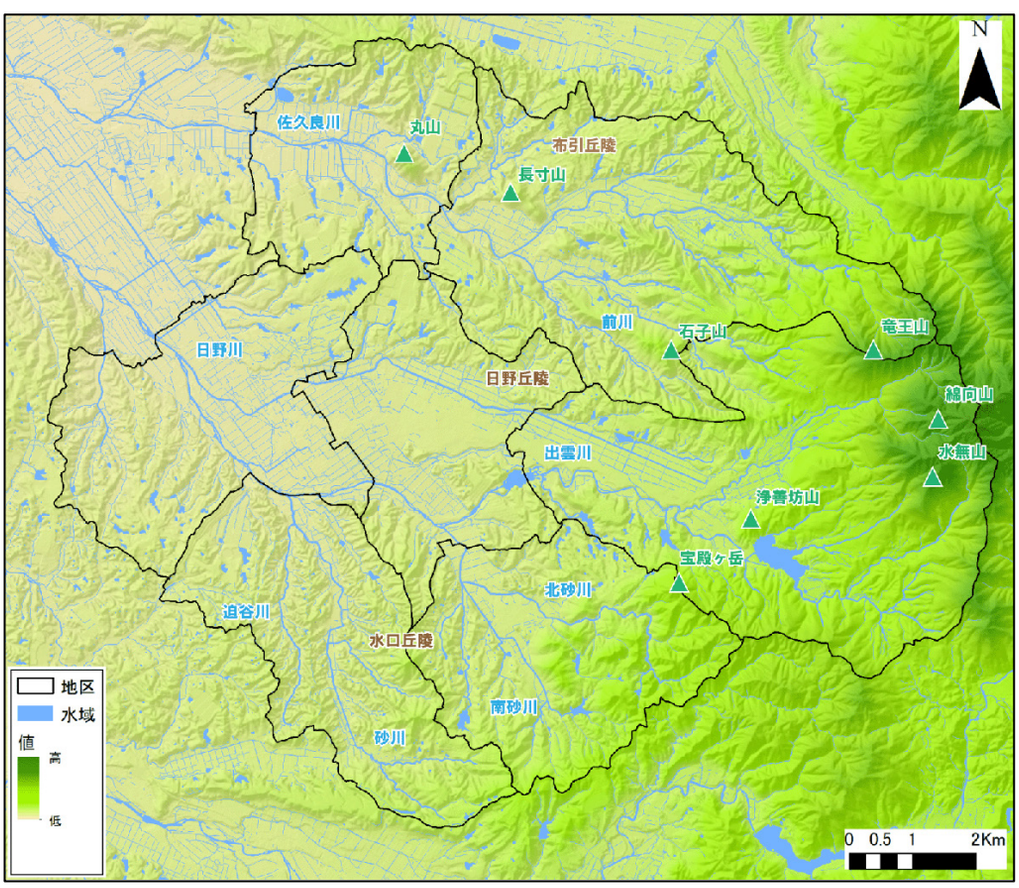
当町の地形は、山地、丘陵、段丘、沖積低地に区別できます。

山地は当町の東部に位置しており、鈴鹿山脈の一高峰である綿向山（標高 1,110m）を主峰とする標高 800m以上の竜王山（826m）、水無山（990m）の山塊と、標高 700m以下の浄善坊山（547m）、宝殿ヶ岳（猪鼻岳）（508m）等の山塊がそびえています。

丘陵（標高 400m以下）は、山地から西方に葉脈状に伸びており、一部では石子山（341m）、長寸山（269m）、丸山（270m）等の残丘が見られます。

段丘は、綿向山を水源とし町域の中央部の丘陵を開析して流れる日野川とその支流沿いに数段認められます。

沖積低地は、日野川や佐久良川の下流域の平野部や山間部の谷間に広がります。このうち、日野谷と呼ばれる日野川や支流の出雲川沿いの段丘や平野部（東西約 8.0 km、南北約 0.5 から 2.0 km）は、古来、行政面・文化面の中心地となっており、市街地が発達し、周囲はまとまった耕地として利用されています。また、桜谷と呼ばれる佐久良川や前川沿いの段丘や平野部（東西約 8.0 km、南北約 0.2 から 1.0 km）にも集落が営まれ、耕地が広がる他、周囲の丘陵上にも耕地が展開しています。さらに、丘陵間を縫って日野川へ流れる日野川支流の迫谷川、砂川、南砂川、北砂川沿いの段丘や平野部にもそれぞれ複数の集落が営まれています。



日野町の地形

序章
第1章
第2章
第3章
第4章
第5章
第6章
第7章
第8章
資料編

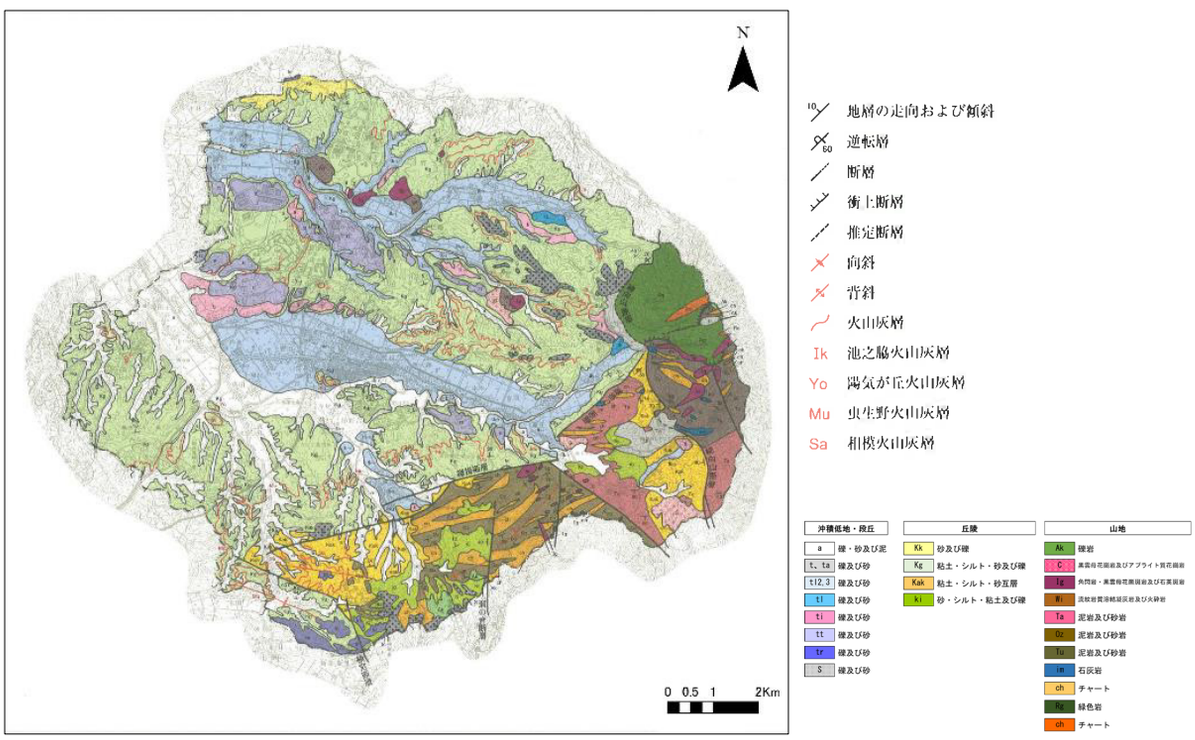
(3)地質

町域東部に位置する山地の地質は、岩石の種類と成立年代が異なる２つのグループで構成されています。第１は、古生代二畳紀から中生代ジュラ紀（約２億５千万年から１億５千万年前）までに海洋底に形成された岩石で、砂岩・泥岩・緑色岩・チャート・石灰岩などが複雑に分布しています。綿向山や浄善坊山一帯には灰黒色や黒色の砂岩や泥岩（粘板岩）が、竜王山から綿向山北側にはやや緑色がかった緑色岩（輝緑凝灰岩）が分布しています。また、鎌掛の屏風岩（鎌掛／国指定）を含む石楠花渓から宝殿ヶ岳（猪鼻岳）一帯にはチャートが分布しています。鎌掛の屏風岩は、古生代の岩石でありながら鈴鹿山脈の造山活動による褶曲の影響を受けておらず、直線的な縞模様が特徴です。

第２は、中生代白亜紀末（約７千万年前）にマグマの活動により形成され固結した岩石で、石子山西側半分や平子峠一帯、蔵王ダム堰堤北側に分布する花崗岩がこれにあたります。綿向山麓の接触変質地帯（北畑／国指定）は、古生代の岩石である石灰岩が、中生代のマグマ貫入による熱変成を受けてできた変成岩であり、地質学的に貴重です。

丘陵の地質は、約 200 から 180 万年前の低湿地堆積層である古琵琶湖層群の半固結の砂や粘土の堆積で構成されており、ところによっては山地を構成する岩石が露頭しているところも見られます。古琵琶湖層から産出する別所高師小僧（別所／国指定）は、地下水に溶けた鉄分が植物の根や枝に付着して沈殿したものです。

日野川、佐久良川両岸の平地は、古琵琶湖層の上にそれぞれの川によって運ばれた礫や砂が堆積してできた沖積層で形成されています。



資料：『近江日野の歴史』（第１巻 自然・古代編）

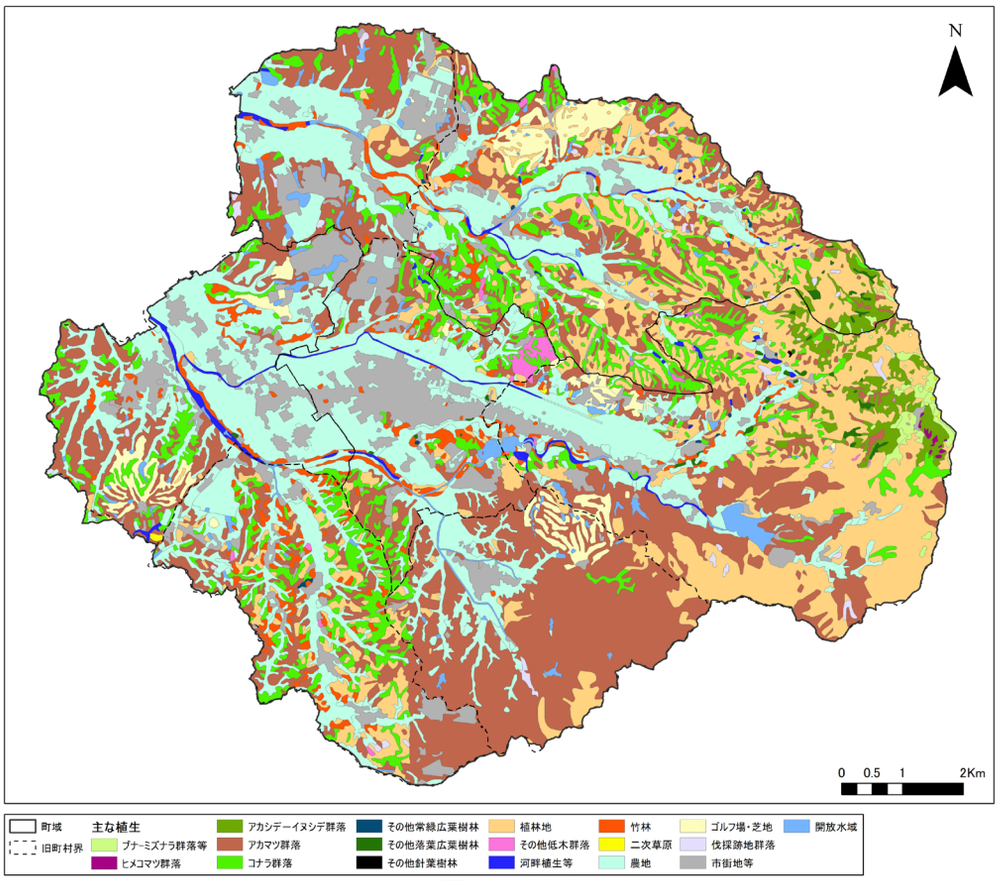
日野町の地質

(4)生態系

山地の生態系としては、植物では、おおむね標高 500m以上の地域は冷温帯のブナをはじめとした夏緑広葉樹林が、300 から 900mの中間温帯にはアカマツやイヌシデをはじめとした落葉広葉樹林が発達しています。動物では、イノシシ・ニホンジカ・ニホンカモシカ（国指定）等の哺乳類、コルリ・クロツグミをはじめとした豊富な夏鳥等の鳥類、イワナ・カジカ等の魚類、カラスアゲハ・ギフチョウ・オオムラサキ等の昆虫類等が見られます。

丘陵・平地の生態系としては、手入れされた水田や里山等、人の暮らしと自然が調和した環境が保たれており、植物では、アカマツ・コナラ・ヨシ・ツバキ・ススキ等、動物では、タヌキ・キツネ等の哺乳類、カイツブリ・サギ・カワセミ等の鳥類、フナ・コイ・ハヤ・ドジョウ・カワムツ等の魚類のように多様な動植物が分布しています。

特に、綿向山をはじめとする東部の山地には、「滋賀県で大切にすべき野生生物（滋賀県版レッドデータブック）2020 年版」（県選定）に選定されている希少な動植物が分布しており、選定種にワタムキアザミ、ニホンカモシカ、コルリ等があります。また、山地の一部は鈴鹿国定公園に含まれており、公園内に分布する「綿向山のブナ林」、「綿向山のイヌシデ林」、「綿向山のイブキザサ群落」、「鎌掛のホンシャクナゲ群落」の４つの植物群落が「滋賀県で大切にすべき植物群落」（県選定）に選定されています。



日野町の植生

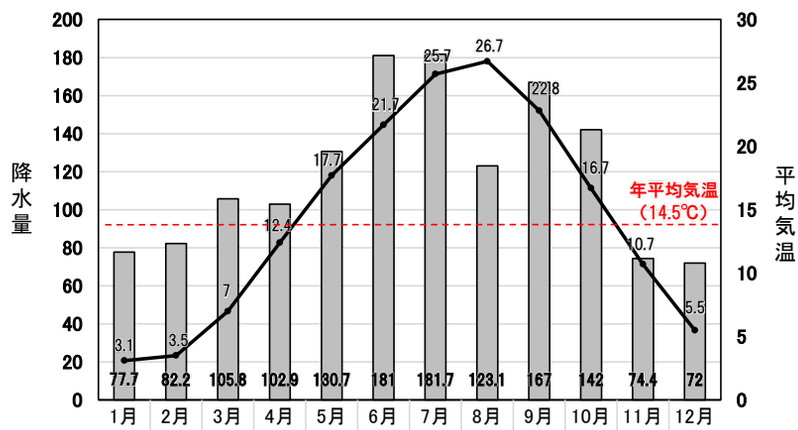
資料：自然環境保全基礎調査（環境省自然環境局生物多様性センター）
『近江日野の歴史』（第１巻 自然・古代編）

(5)気候

当町の気候は、温暖な瀬戸内式気候区に属していますが、内陸に位置するため、年平均気温（1991 から 2020 年の平均）は 14.5℃と琵琶湖沿岸部に比べてやや低くなっています。なお、令和４年度の平均気温は 15.0℃（日野町統計書）で、上昇傾向にあります。

月別の平均気温では、８月の 26.7℃が最も高く、１月の 3.1℃が最も低くなります。降水量は梅雨や台風の影響を受け７月にピークがあります。また、冬期には平野部においても降雪があり、山地においてはまとまった積雪が見られます。

アメダス東近江観測局における平均気温と降水量（1991 から 2020 年の平均）



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
降水量(mm)	77.7	82.2	105.8	102.9	130.7	181	181.7	123.1	167	142	74.4	72
平均気温(℃)	3.1	3.5	7	12.4	17.7	21.7	25.7	26.7	22.8	16.7	10.7	5.5

資料：気象庁 HP
日野町地域防災計画（地震災害対策・風水害対策編）（令和４年３月改訂）

2. 社会環境

(1)町の成り立ち

1）日野町（ひのちょう）の由来

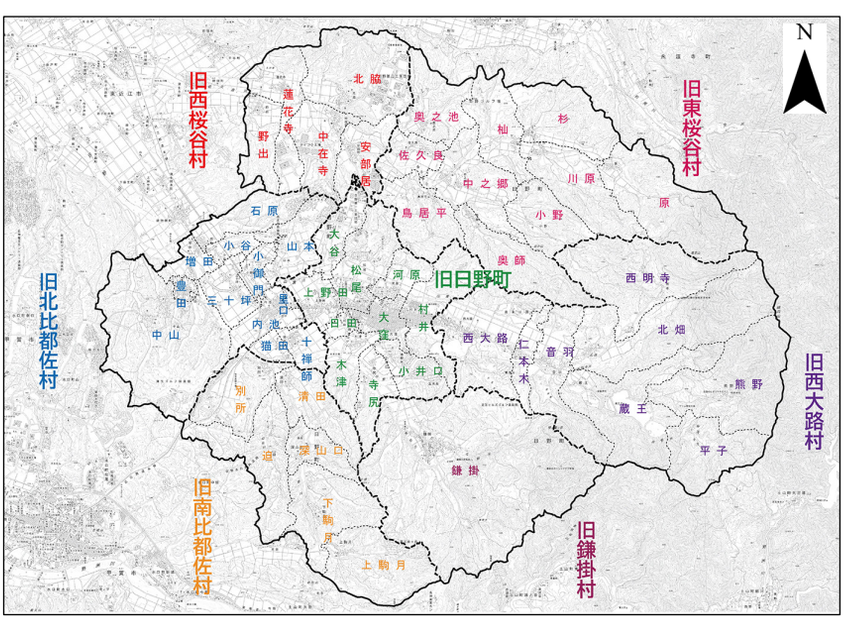
「日野」という名称が初めて歴史に登場するのは天喜４（1056）年で、「東大寺使神成則請文」という記録に藤原摂関家ゆかりの法成寺領「日野御牧」として登場します。

2）町域の変遷

当町域は、江戸時代には 55 の町村に分かれており、幕府、旗本、彦根藩、川越藩、水口藩、仁正寺（西大路）藩等の領地が入り混じり、なかには一村を複数の領主が分割することもあり、その領有状態は複雑なものでした。

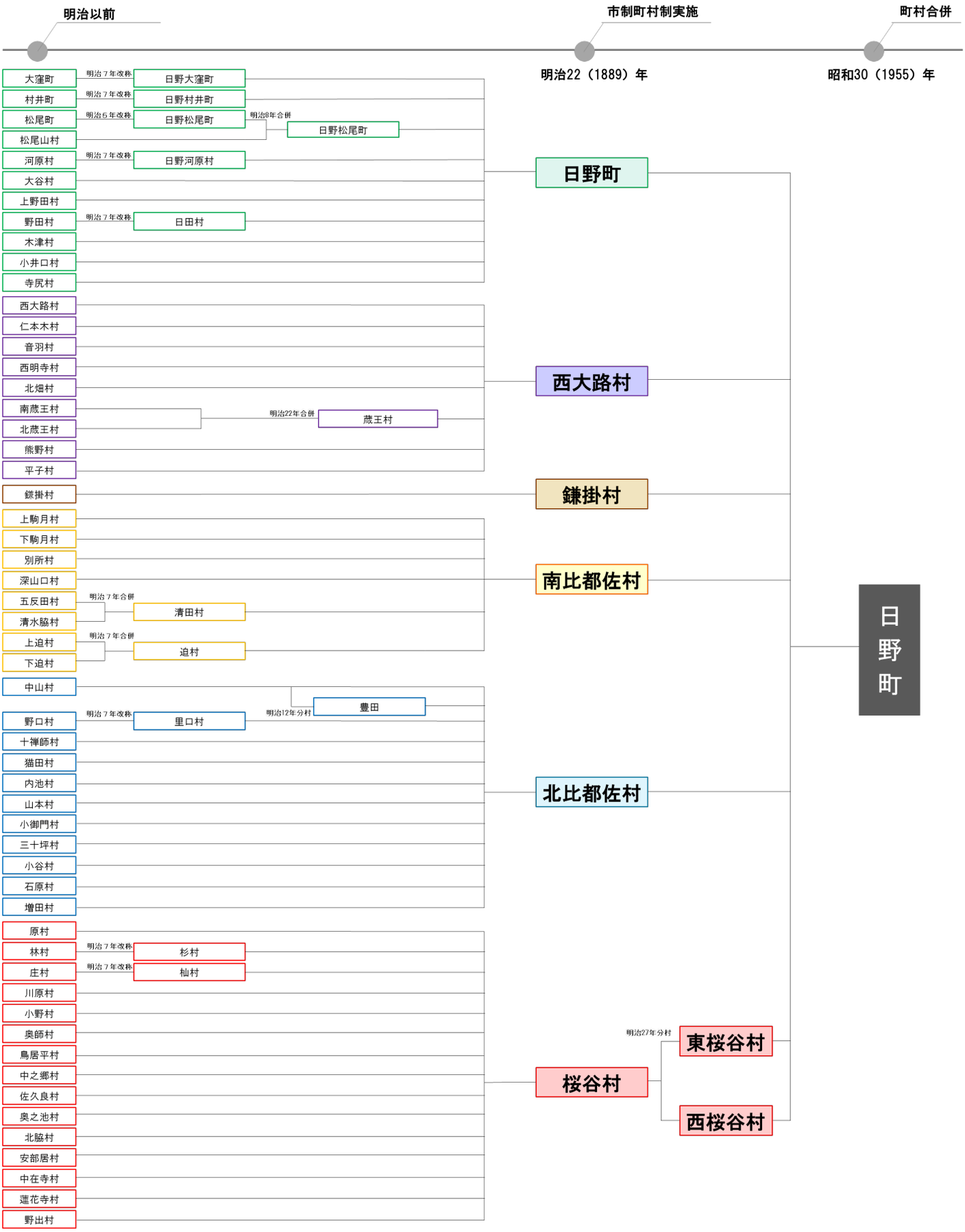
明治５(1872)年の廃藩置県による滋賀県の成立や同年の区制の実施、明治７(1874)年・明治 11（1878）年の町村分合等を経て、明治 22（1889）年に施行された町村制により、「日野町」、「桜谷村」、「西大路村」、「鎌掛村」、「南比都佐村」、「北比都佐村」が成立、明治 27（1894）年に「桜谷村」が村域の広さや生業等の違いから「東桜谷村」と「西桜谷村」に分村し、１町６村が成立し戦後まで続きました。江戸時代の町村は、大字となりました。

昭和 28（1953）年の町村合併促進法に基づく全国的な町村合併の流れの中で、昭和 30（1955）年３月 16 日に１町６村が合併し、現在の日野町が誕生しました。旧来の１町６村の枠組は、まちづくりの基本単位である「日野地区」、「東桜谷地区」、「西桜谷地区」、「西大路地区」、「鎌掛地区」、「南比都佐地区」、「必佐地区」として受け継がれています。明治以降から現在の当町の姿が形作られた町村合併の経緯を次項に示します。



資料：『ふるさと日野の歴史』に加筆

日野町の旧町村


明治以前
市制町村制実施
町村合併
明治22（1889）年
昭和30（1955）年
大窪町
村井町
松尾町
松尾山村
河原村
大谷村
上野田村
野田村
木津村
小井口村
寺尻村
明治７年改称
日野大窪町
明治７年改称
日野村井町
明治５年改称
日野松尾町
明治8年合併
日野松尾町
明治７年改称
日野河原村
明治７年改称
日田村
日野町
西大路村
仁本木村
音羽村
西明寺村
北畑村
南蔵王村
北蔵王村
熊野村
平子村
明治22年合併
蔵王村
西大路村
鎌掛村
鎌掛村
上駒月村
下駒月村
別所村
深山口村
五反田村
清水脇村
上迫村
下迫村
明治７年合併
清田村
明治７年合併
迫村
南比都佐村
中山村
野口村
十禅師村
猫田村
内池村
山本村
小御門村
三十坪村
小谷村
石原村
増田村
明治７年改称
里口村
明治12年分村
豊田
北比都佐村
原村
林村
庄村
川原村
小野村
奥師村
鳥居平村
中之郷村
佐久良村
奥之池村
北脇村
安部居村
中在寺村
蓮花寺村
野出村
明治７年改称
杉村
明治７年改称
杣村
桜谷村
明治27年分村
東桜谷村
西桜谷村
日野町

合併の経緯

３）地区・自治会、学区

町域は、旧町村の区域を範囲とした７地区に区分されています。各地区には地区公民館が設置され、それぞれの地域性を活(い)かした自主事業が展開されており、当町のまちづくりの大きな特徴の１つとなっています。

町域には、主に江戸時代の町村を由来とする地縁による団体（以下、「自治会等」とする）が組織されており、町民にとって最も身近な自治活動の場となっています。

また、町内には５つの小学校区（日野小学校〈日野・鎌掛地区〉・桜谷小学校〈東桜谷・西桜谷地区〉・西大路小学校・南比都佐小学校・必佐小学校）と１つの中学校（日野中学校）、１つの高校（県立日野高校）が所在しており、各学校では、地域や行政と連携して様々な地域学習や地域交流に取り組んでいます。

日野町の地区と自治会等　　令和６年８月現在

地区	自治会等
日野	大字村井、村井１区（北今町上・北今町下・北上町・北中町・西之宮町・宮前町）、村井２区（本町上・本町下・新町・村井越川町）、村井３区（呉服町・横町・長嶋町・鍛治今町）、村井４区、小井口、寺尻、木津、日田、大字大窪、大窪１区（清水町・内池町・双六町・河原田町・上清雲町・下清雲町）、大窪２区（下大将軍町・今井町・仕出町・永繁町・杉野神町・下鍛治町）、大窪３区（上鍛冶町・金英町・南大窪町）、大窪４区（上岡本町・中岡本町・下岡本町）、大窪５区（大窪町・上大窪町・大窪越川町・大和町・御舎利町・堀端町・玉屋町）、河原、大字松尾、松尾１区、松尾２区、松尾３区、上野田（上野田上・上野田中・上野田下）、大谷、椿野台、五月台、中道
東桜谷	原、川原、杉、杣、小野、奥師、鳥居平、中之郷、佐久良、奥之池
西桜谷	安部居、中在寺、北脇、蓮花寺、野出
西大路	大字西大路、西大路１区（向町・栄町・堀端町・殿町）、西大路２区（水落町・仲出町・大日町）、西大路３区（大石町・幅野町・浦出町）、仁本木、音羽、北畑、西明寺、蔵王、平子、熊野
鎌掛	大字鎌掛、鎌掛１区、鎌掛２区、鎌掛３区、鎌掛４区、鎌掛５区、鎌掛６区
南比都佐	上駒月、下駒月、深山口、上迫、下迫、清田、別所、曙
必佐	三十坪上、三十坪下、内池西、内池東、猫田、十禅師、里口、山本、小御門、小谷、石原、増田、豊田１区、豊田２区、豊田３区、豊田４区、豊田５区、中山西、中山東、徳谷、湖南サンライズ

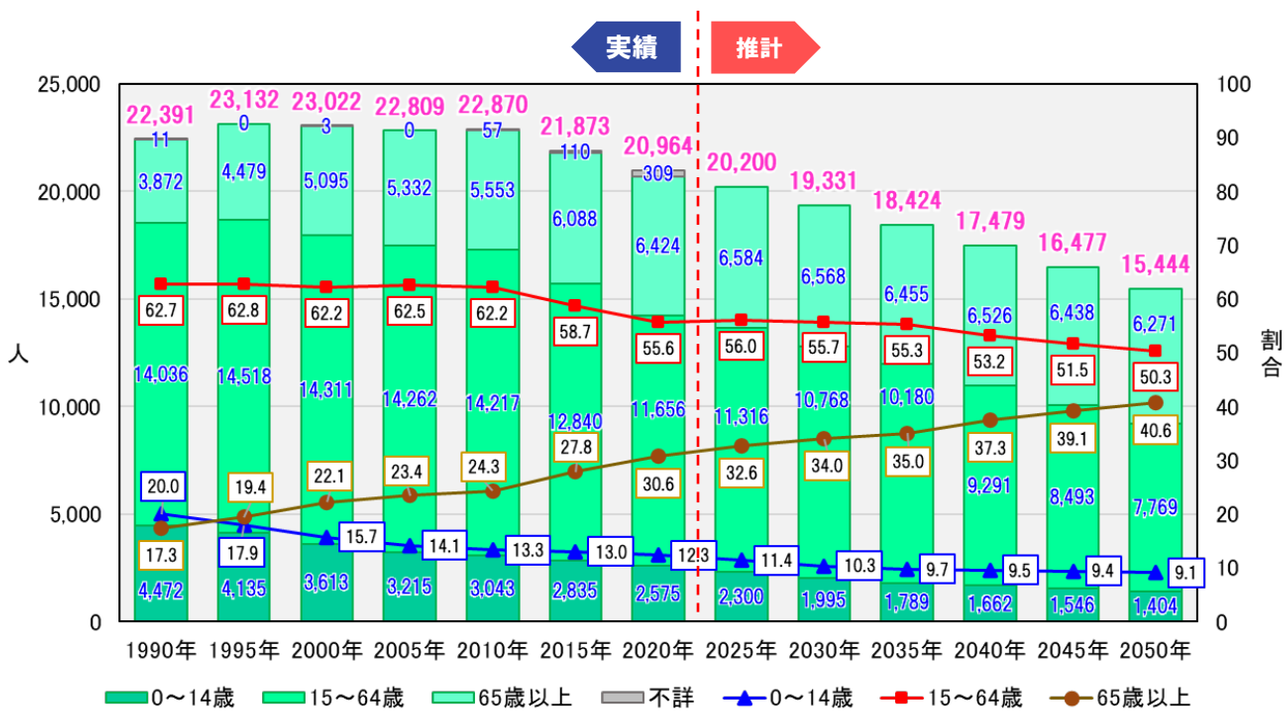
(2)人口動向

当町の人口は、平成２（1990）年以降、微増減を繰り返しながら推移してきました。22,870 人となった平成 22（2010）年以降は減少傾向となり、令和２（2020）年では、20,964 人、令和６（2024）年８月現在、20,749 人となっています。

人口比率をみると、令和２（2020）年時点では年少人口（0～14 歳）は 12.3%、生産年齢人口（15～64 歳）は 55.6%、老年人口（65 歳以上）は 30.6%となっています。

人口の将来推計をみると、今後も人口減少・高齢化が進行し、令和 12（2030）年には人口が２万人を割り込み、令和 32（2050）年には、15,444 人となり、高齢化率が 40%を超えることが予測されています。

日野町の人口の推移



※年齢不詳を含む
※割合は小数点２位を四捨五入して表示しており、合計値が 100%とならない場合があります。
資料：国勢調査、日本の地域別将来推計人口（令和５（2023）年推計）
1990 年～2020 年（国勢調査）　2025 年～2050 年（国立社会保障・人口問題研究所）

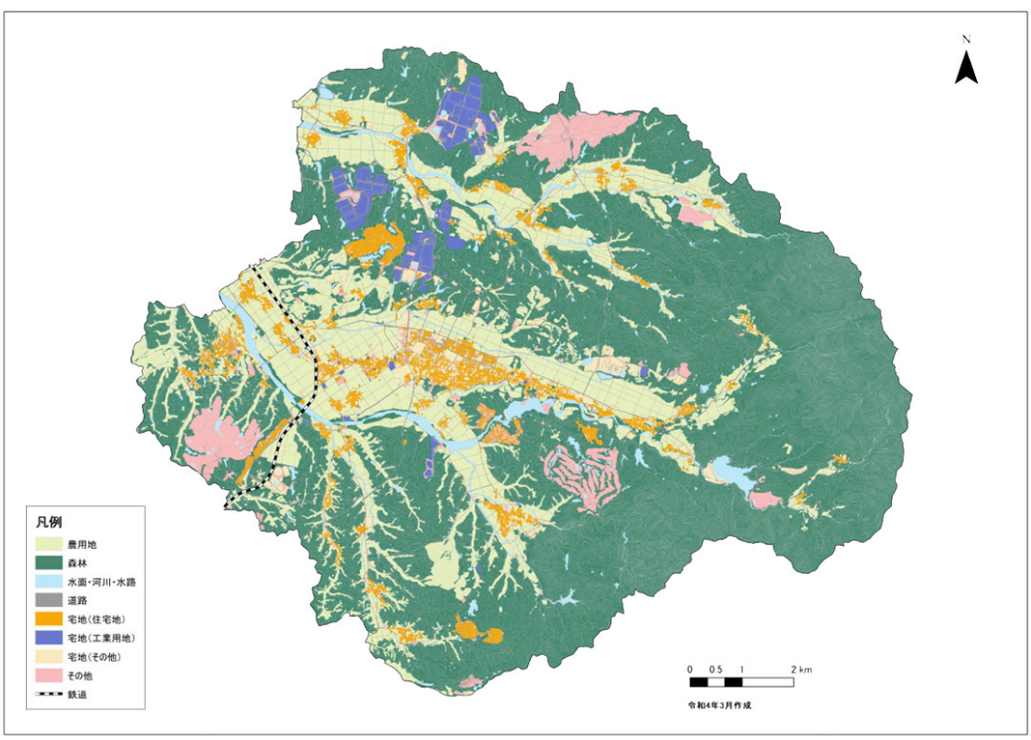
(3)土地利用状況

当町の土地面積は 117.60 ㎢で、大部分は山地と丘陵地からなり、集落や耕地は綿向山から発する日野川沿いの日野谷と竜王山から発する佐久良川沿いの桜谷に分布しています。令和元（2019）年時点での可住地面積（町土総面積から林野面積と主要湖沼面積を差し引いた面積）は、56.36 ㎢です。

利用区分別面積の現況は、農用地が 1,980ha と全体の 16.8%を占め、丘陵の間を流れる日野川や佐久良川とその支流沿いの段丘や沖積低地に米作を中心とした穀倉地帯を形成しています。

森林は 6,106ha で全体の 51.9%を占め、東部地域では、鈴鹿山脈に連なる山地を形成し、町の中心部を取り巻く周辺部一帯にも分布しています。水面・河川・水路は 484ha で全体の 4.1%を占め、当町には日野川をはじめ一級河川として 17 河川が流れています。

道路は 462ha で全体の 3.9%を占め、南北方向に国道 307 号、東西方向に国道 477 号が通っています。住宅地や工業用地等からなる宅地は 731ha で全体の 6.2%を占めます。中心市街地は、町中央部から東西方向に延びる中世蒲生氏の城下町や近世の在郷町として栄えた地域を中心に形成されています。近江日野商人（以下、「日野商人」とする）の本宅や町家等からなる風情ある町並み景観が形成されていますが、空き家・空き地が増加しており、有効活用に向けた取組を加速させる必要があります。旧市街地に隣接する地域には、土地区画整理事業によって住宅地が整備され、人口定着が進んでいます。北部丘陵部の国道 307 号沿いは工業団地が開発され、工業用地が集積しています。



資料：日野町国土利用計画（第６次）【資料編】に一部加筆

日野町の土地利用

(4)交通

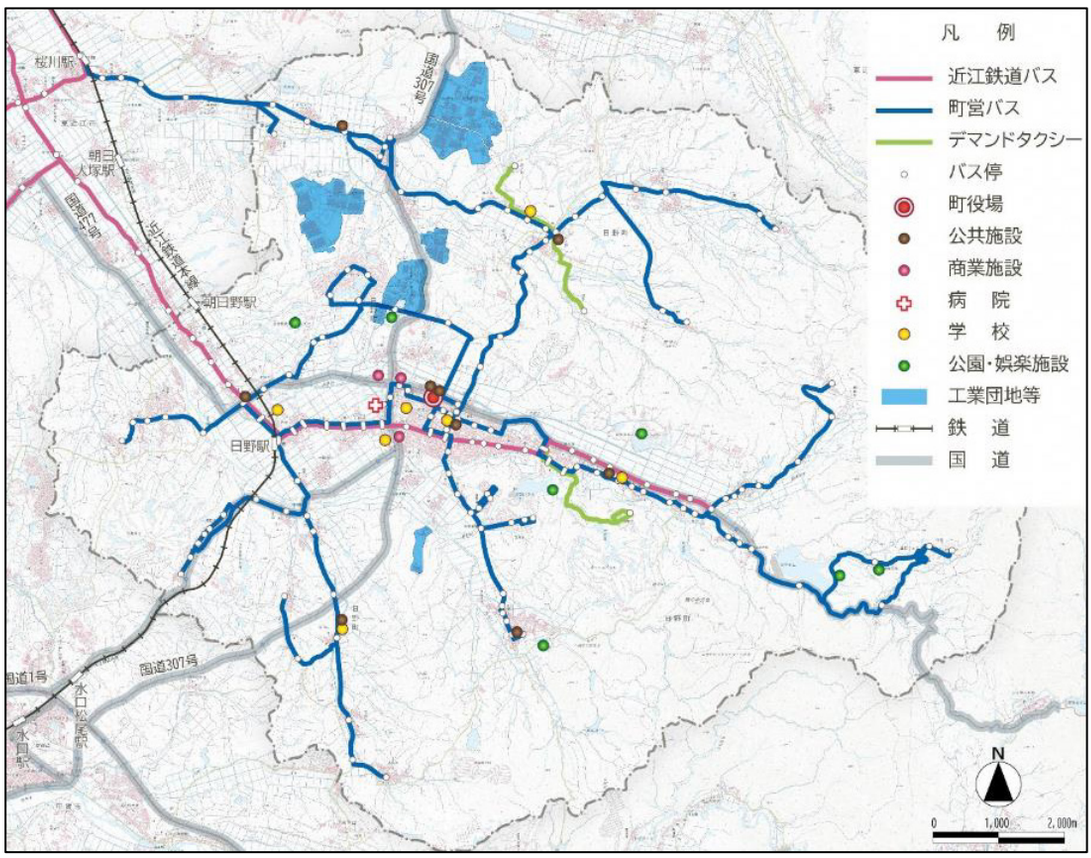
交通は、南北に国道 307 号が縦断し、東西には国道 477 号が横断しており、当町の骨格を形成しています。

主な公共交通機関については、近江鉄道、近江鉄道バス（路線バス）および日野町営バス（コミュニティバス）等があります。

鉄道は、貴生川駅と米原駅間を運行している近江鉄道本線が町の西部を通り、日野駅が当町の玄関口となっています。

バスは、近江鉄道バス日八線がＪＲ近江八幡駅から近江鉄道日野駅を経て北畑口まで運行しており、日野町営バスは町内各地区から病院や商業施設等を結ぶ住民の生活の足として機能しています。

なお、日野町営バス等の運行がない地域では、集落と最寄りの日野町営バスの停留所を結ぶ、デマンドタクシー（予約運行制乗合タクシー）を試行運行しているほか、令和５（2023）年３月からＡＩオンデマンド交通（チョイソコひの）の実証実験運行を行っています。



資料：日野町地域公共交通計画（令和６年）

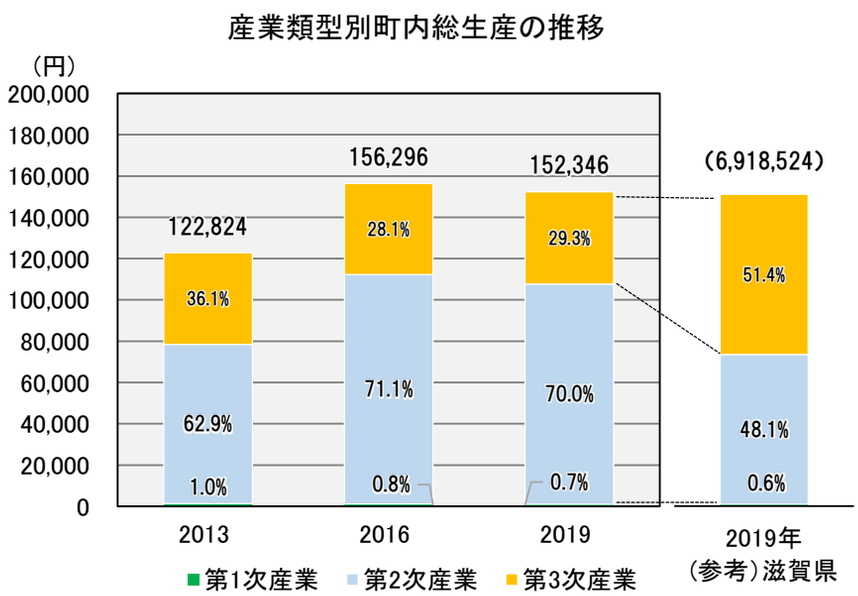
日野町の交通

(5)産業

第１次産業は、稲作を主とする農業が盛んであり、「近江日野牛」や令和４(2022) 年に地理的表示（GI）保護制度に登録された当町発祥の伝統野菜「日野菜」等、様々な農産物に恵まれています。一方で担い手の高齢化・後継者不足が深刻化しており、経営基盤の集約化や収益性の向上等による経営の安定化が図られています。

第２次産業は、伝統的な医薬品製造業をはじめ、工業団地への優良な企業の立地がさらに進んだことなどにより近年は町内総生産の７割を占めています。

第３次産業の商業は、日野駅周辺の商店街や日野商人街道沿いの商店等の地場の商店のほか、国道沿いに郊外型・ロードサイド店舗が分布しています。また、町外からの移住者を中心に古民家を活用した店舗などが増えてきています。



資料：滋賀県市町民経済計算

日野第二工業団地

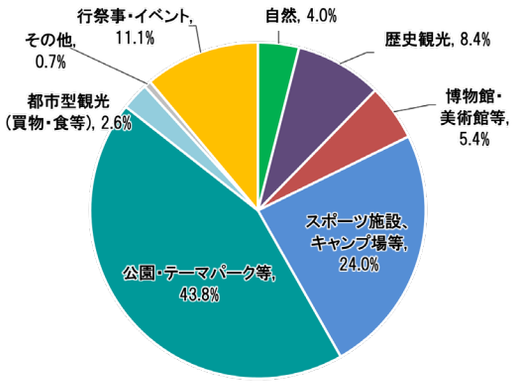
古民家を活用した店舗（村井）

(6)観光

当町には、城跡、寺社、伝統的な町並みをはじめとした文化財が存在しています。さらに、綿向山・日野川等の豊かな自然環境や、滋賀農業公園「ブルーメの丘」、キャンプ場「グリム冒険の森」等の自然を満喫できる施設等、観光資源を多く有する町です。

年間観光入込客数は、55 万人から 65 万人程度で推移してきましたが、令和元（2019）年には直近 10 年間で最大の 740,100 人が当町へ訪れました。令和２年度には、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、402,800 人の入込客数となりました。目的別の内訳を見ると、「スポーツ施設、キャンプ場等」や「公園・テーマパーク等」に関する入込客数が全体の約 70%を占めています。一方で「歴史観光」や「博物館・美術館等」に関する入込客数は全体の約 14%にとどまります。

目的別観光入込客数割合（令和元年）



資料：日野町観光入込客統計調査

滋賀農業公園ブルーメの丘

(7)歴史文化施設

■日野町歴史民俗資料館 近江日野商人館（旧山中兵右衛門邸）

昭和 56（1981）年に代表的な日野商人の１人である山中兵右衛門家から町へ寄贈された本宅です。

この建物は昭和 11（1936）年の建造で、典型的な日野商人の本宅の特徴をそのまま今に残しており、主屋・表門・東蔵・西蔵・井戸屋形・物置が平成 10(1998)年に国の登録有形文化財に登録されています。

日野町歴史民俗資料館
近江日野商人館

■日野まちかど感応館（旧正野薬店）

元禄年間に創業した合薬商正野玄三の旧店舗で、今もなお「萬病感應丸」の大きな看板を掲げ、日野の町並みのシンボルとして親しまれています。

旧店舗・東蔵は江戸時代末期の建築で平成 11(1999)年に国の登録有形文化財に登録されています。

日野まちかど感応館

■近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」

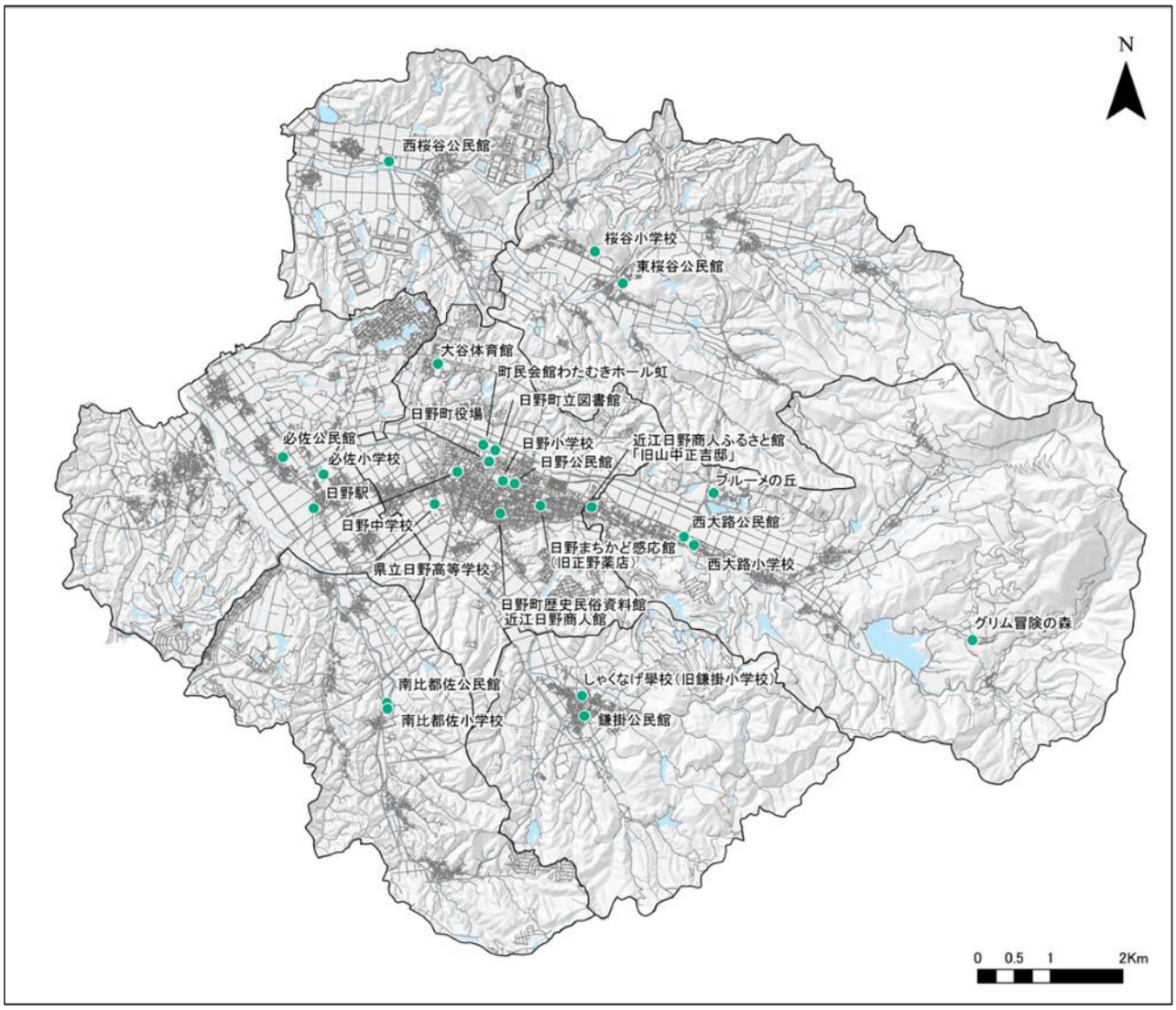
静岡県富士宮市で酒造業を営んだ日野商人山中正吉家の本宅です。江戸時代末期に建てられた農家住宅の形式を踏襲した主屋と、大正から昭和初期に建てられた新座敷棟からなり、形式や意匠が貴重であるとして、平成 27（2015）年に町指定文化財としました。

近江日野商人ふるさと館
「旧山中正吉邸」

■しゃくなげ學校（旧鎌掛小学校）

平成 13（2001）年に廃校となった「旧鎌掛小学校」は、現在「しゃくなげ學校」として NPO 法人蒲生野考現倶楽部が管理しており、農村文化や里山の自然学習を通じて、青少年育成・地域交流の場として地域住民に親しまれています。また、昔懐かしい木造校舎の雰囲気が人気を博し、近年では映画のロケ地やアニメの聖地として、さらにはコンサートの会場として活用されています。

しゃくなげ學校（旧鎌掛小学校）


N
西桜谷公民館
桜谷小学校
東桜谷公民館
大谷体育館
町民会館わたむきホール虹
日野町立図書館
日野町役場
必佐公民館
必佐小学校
日野小学校
日野公民館
近江日野商人ふるさと館
「旧山中正吉邸」
ブルーメの丘
日野駅
日野中学校
西大路公民館
日野まちかど感応館
(旧正野薬店)
西大路小学校
県立日野高等学校
日野町歴史民俗資料館
近江日野商人館
グリム冒険の森
南比都佐公民館
しゃくなげ學校(旧鎌掛小学校)
南比都佐小学校
鎌掛公民館
0 0.5 1 2Km

日野町の施設分布図

3. 日野町の歴史的変遷

(1)原始・古代

（縄文・弥生時代）

当町における人々の営みは、縄文時代草創期の約１万３千年前に始まります。出雲川沿いの丘陵や平野部で狩猟活動が行われており、北代遺跡（上野田）では有舌尖頭器（槍先）が見つかっています。

弥生時代中期（紀元前 100 年頃）になると、出雲川と日野川の間に広がる平野部（三十坪・内池・木津等）に集落が作られました。人々はこの頃から定住しはじめており、野辺遺跡（三十坪）等で竪穴建物群や方形周溝墓が見つかっています。

（古代）

古墳時代前期の４世紀末頃には、日野川沿いの低丘陵上に当町で最古・最大の日枝社古墳（大窪）が造られました。この古墳は、その形や規模から、現在の日野町一帯だけではなく、日野川中流域に及ぶ広大な地域を支配した首長の墓と考えられています。この頃になると、出雲川や日野川沿いに集落が形成されるようになりました。宮ノ前遺跡（石原）の沼跡からは、木製の農具とともに祭祀具が見つかっており、水辺に暮らした人々の水に対する畏敬の念が表れています。

古墳時代の終り頃にあたる６世紀末になると、より上流域まで開発が進み、日野川上流の平野部に音羽西古墳（音羽）が、佐久良川上流の山腹に城山古墳群（佐久良）が造られました。いずれもこの地域の有力者のものと考えられています。この頃の住居の特徴として、カマドが造り付けられるようになったことが挙げられます。これにより、居住空間が広がったり、調理用の土器の形状が変化する等、生活様式が大きく変わりました。町域では、北代遺跡、内池遺跡（内池）、田寺遺跡（増田）、宮ノ前遺跡で、カマドが造り付けられた竪穴建物が見つかっています。

横穴式石室（音羽西古墳）

飛鳥時代の７世紀中頃、百済滅亡に際して多くの百済人が蒲生・神崎郡へ移住しました。当町ゆかりの渡来人として鬼室神社（小野）に祀られる鬼室集斯もその１人で、近江朝廷では学問を司る学識頭を務めました。

この前後の時期、当町では渡来人が伝えた技術や文化の影響を示す遺構が見つかっており、7世紀初頭の小御門古墳群（小御門）では、在来の古墳の形と異なる特殊な構造をもつ横穴式木芯粘土室墳が見つかっています。また、8世紀の野田道遺跡（寺尻）や風呂流遺跡（寺尻）では、朝鮮半島から中国東北部で使われた床暖房施設であるオンドル状遺構や製鉄遺構が見つかっています。

対外情勢の悪化から天智9（669）年12月には、天智天皇が遷都の視察に「匱迩野」を訪れています。匱迩野は比都佐神社（十禅師）周辺の平野部一帯を指し、天皇との特別な関係があった地と考えられています。

奈良時代に入ると、8世紀中頃に成立した条里制に基づく地割が当町域にも設定されました。石原・増田・小谷・三十坪・小御門・内池・猫田・十禅師等で地割の痕跡が見つかっており、律令国家による耕地開発が日野川中流域の平野部まで及んでいたことを示しています。

また、この頃になると、町域北西部の布引丘陵で須恵器や瓦の生産が行われました。8世紀前半に壺焼谷窯跡（蓮花寺）で始まった生産は、9世紀の大田和窯跡（迫）まで場所を移動しつつ行われました。続く10世紀後半には作谷窯跡（中山／県指定）等で緑釉陶器が生産され、特産品として平安京を中心に流通しました。

緑釉陶器（北代遺跡出土）

平安時代後期の10世紀から11世紀になると、祇園社領守富保、山門（比叡山）領必佐荘、藤原摂関家ゆかりの法成寺領日野牧等、有力貴族や寺社による荘園経営の拡大が進み、この影響を受けて集落数が急増しました。

平安時代初期に比叡山延暦寺（大津市）が創建されると、綿向山を中心とした山岳信仰と結び付き、金剛定寺（中山）や西明寺（西明寺）、正明寺（松尾）等、天台宗の寺院が多数建立されました。各寺院には、仏画や仏像をはじめ貴重な文化財が伝来し、往時の繁栄を今に伝えています。

木造十一面観音立像（西明寺）

また、綿向山の山岳信仰を源流とする大嵩神社（北畑）は、次第に地主神としての性格を持つようになり、やがて里宮として馬見岡綿向神社（村井）が造営されました。このほか町内には、式内社の比都佐神社、長寸神社（中之郷）、大屋神社（杉）があり、古くからの信仰を伝えています。

(2)中世

古代に成立した荘園は、中世になるとより広い範囲を含むものになり、鎌倉時代前期になると、前代に比べて小規模な集落がさらに増加しました。

一方、鎌倉時代末期から室町時代になると、小さな集落は集約され、大きな村としてまとまるようになりました。町内の寺社には、鎌倉時代から南北朝時代の石造品が数多く存在しています。石造品には、有力農民や侍を中心に結成された信仰集団である「一結衆」や「村」の文字が刻まれており、村の鎮守や村堂を拠り所とした惣村が展開していたことを示しています。

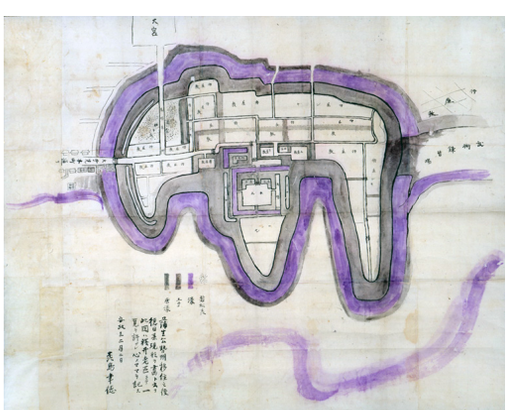
正法寺宝塔（鎌掛）

こうした村の登場は、新たな在地領主の台頭を促しました。荘園領主の命を受け、その経営を行っていた「藤原氏」は、幕府や近江守護六角氏のどちらにも属さず、荘園領主のもとで甲賀郡にまで勢力を広げて行きました。

14 世紀になると藤原氏が当町全域に儀俄氏や蒲生氏等の一族を配して支配するようになり、やがて六角氏の支配が強まると蒲生郡郡奉行として活躍しました。

この時点で藤原氏の分流である蒲生氏が台頭し、室町幕府と強い関係を結んで勢力を広げました。大谷古墓（大谷）からは、12 世紀中頃から 15 世紀の十数基からなる火葬墓が見つかっています。米石と称する蔵王産の花崗岩製の五輪塔が建てられたり、蔵骨器に東海・北陸地方や中国製の陶磁器が使われたりしていたことから、在地領主クラスの墓地であり、蒲生氏との関連が指摘されています。

15 世紀中期には、蒲生貞秀が音羽城（音羽）を拠点に当町南部を支配しました。一方、当町北部の桜谷一帯は、京極氏の家臣である小倉実澄が佐久良城（佐久良）を拠点に支配しました。応仁の乱の際、蒲生氏と小倉氏はいずれも室町幕府方として活動し、各地で六角氏と戦闘を繰り広げました。現在も町内には、蒲生氏・小倉氏の拠点城館である音羽城跡・中野城跡・佐久良城跡や、その一族・家臣等が築いた中世の城館跡が多数残っています。



蒲生城跡見取図

信楽院本堂（村井）

応仁の乱の際、蒲生氏や小倉氏は、戦禍を避けて近江に避難してきた公家や学僧を保護し、盛んに交流しました。蒲生貞秀は、飛鳥井正親や連歌師の宗祇と盛んに交流し、和歌・連歌を通じて京の文化をもたらしました。また、浄土宗に深く帰依しており、信楽院（村井）を蒲生氏の菩提寺として庇護したほか、知恩院（京都市）の復興にも尽力しました。小倉実澄は禅宗に篤く帰依し、永源寺（東近江市）に庇護した相国寺（京都市）の横川景三との交流により、五山文学等の優れた禅宗文化をもたらしました。

商業活動では、六角氏や小倉氏の庇護を受け、鈴鹿山脈を越えて東海地方の産物を扱った四本商人（山越商人）のもとで、品物の運搬等を行った「足子」と呼ばれる小商人が当町内にも複数存在し活躍しました。彼らは商団を組み、東山道（中山道）と東海道を結んだ「市道（のちの御代参街道）」や伊勢と結んだ峠道を通り交易を行いました。応永33（1426）年には、四本商人の１つである保内商人が伊勢との交易の拠点として「日野市」で商売を行った記録が残ります。この「日野市」がのちに蒲生氏の城下町「日野町」へと発展し、江戸時代に在郷町「日野三町」や仁正寺藩陣屋町へと展開しました。

当町は中世の近江でも有数の浄土真宗の拠点として知られており、日野牧五ヶ寺と称された有力寺院がありました。町内各地に、蓮如隠棲伝承が伝わるほか、本誓寺（日田）の金泥十字名号をはじめ、南北朝時代の美術工芸品が数多く伝わっています。

15 世紀末になると、蒲生氏と小倉氏は近江守護に復帰した六角氏との関係を深めました。このうち蒲生氏は 16 世紀初頭には六角氏に臣従し、蒲生定秀は「日野市」付近に中野城（西大路）を築き、のちに日野町域にあたる蒲生郡南東部を支配しました。その後、定秀は六角氏の重臣となり、子の賢秀とともに六角氏を支えましたが、織田信長が上洛するとこれに従いました。蒲生氏は、信長から近江国と伊勢国との間の要所を支配する一族として重視され、賢秀の子賦秀（氏郷）は信長の娘婿となり、親子で功績を重ねるとともに、中野城の城下町を整備しました。本能寺の変後は羽柴秀吉に従い功績を重ね、その庇護を受けた日野はさらに発展しました。

天正 12（1584）年に蒲生賦秀（氏郷）が伊勢へ国替えとなった後は、秀吉の直轄地あるいは羽柴秀次や長束正家の支配地となりましたが、蒲生氏の足跡は城跡や様々な伝承として現在も町内各地に残っています。

(3)近世

江戸時代における当町は、３町と 52 村から構成されていました。このうち多くの村は、近江国内の小藩の領地や他国の飛地、旗本・公家の領地が錯綜する「非領国」と呼ばれる状況でした。また、１つの村に複数の領主が存在する「相給村」も存在しました。領主の大半は本拠地が町域外であったため、年貢収納や人別等にかかわる行政を百姓や町人に任せていました。また、大井をはじめとする用水や、綿向山・竜王山を含む里山は町村が共同で利用したことから、村を越えた自治が発達しました。村役人が作成した膨大な文書は、現在も庄屋文書や大字文書として旧家や自治会に受け継がれており、自治の伝統を今に伝えています。

このようななか、仁正寺（西大路）村に陣屋を構え、２万石（のちに１万７千石）を領したのが大名市橋氏です。10 代にわたって領地を治め、その功績は西大路を陣屋町として再整備したほか、治水・土木工事や地域誌の編さんなど多岐にわたります。西大路には、菩提寺の清源寺をはじめ、市橋氏ゆかりの文化財が数多く伝わります。

江戸時代は、全国規模で街道の整備が進められた時代です。町域には、中山道愛知川宿と東海道土山宿を結ぶ脇往還（後の御代参街道）が通り、鎌掛宿と石原宿の２つの宿場が整備され、「商いの道」として、また伊勢・多賀への「祈りの道」として多くの人や物が行き交いました。街道沿いには数多くの道標が残されており、「伊勢」、「多賀」、「日野」等の行き先が刻まれています。

石造常夜灯（伊勢道）

戦国時代に城下町として栄えた村井町・大窪町・松尾町の日野三町は、蒲生氏の転封により一時衰退しますが、江戸時代には日野鉄砲や日野椀、合薬の産地として活況を呈し、在郷町として発展しました。

文政年間の「江州日野三町絵図」に描かれる区画や道路は、現在の中心市街地とほぼ一致します。当時の村明細帳によれば、在郷町の家数は約 1,300 軒、人口約 5,000 人で、日野三町は湖東地方有数の経済・文化都市として栄えました。

萬病感應丸

序章
第1章
第2章
第3章
第4章
第5章
第6章
第7章
第8章
資料編

産業面では、鈴鹿の豊富な木材を用いた地場産業である日野椀の生産が江戸時代前期に隆盛を極めました。正徳年間に編まれた『和漢三才図会』には日本７大生産地の１つとして紹介されています。江戸時代中期以降は、正野玄三家の萬病感應丸に代表される合薬の製造が盛んとなり、18 世紀中期の売薬業者は 100 軒を数えました。

日野商人の行商旅姿（昭和初期の再現）

これら地場産業の振興を背景として、17 世紀前期から日野商人と呼ばれる日野出身の他国稼ぎ商人が活躍するようになりました。彼らは、江戸開幕で賑わう北関東や東海地方で日野椀・合薬を携えて行商し、財を蓄えると日野に本宅を置いたまま行商先に出店を構え醸造業を営みました。町域には、「旧山中兵右衛門家住宅」（大窪／国登録）や「旧山中正吉家住宅」（西大路／町指定）をはじめとする多くの日野商人本宅が残されており、往時の繁栄ぶりを伝えています。

日野商人は、「大当番仲間」を組織し、構成員が利用できる指定の旅籠や流通業者網を整備しました。利益独占を旨とした同業者仲間の活動が基本であった当時において、地縁により互いの商売を支えあう方法は先進的なものとして評価されています。また日野商人は、見返りを期待せず人知れず善行を積む「陰徳善事」の精神に基づき、商いで得た利益を積極的に社会に還元し、当町だけでなく出店を置いた地域の発展に大きく貢献しました。

宝暦６（1756）年、日野三町で大火があり、町場の８割を焼失する被害にあいましたが、日野商人や町人が力を合わせて町の復興を果たしました。現在、私たちが目にしている町並みや寺院、神社がある中心市街地の風景は、宝暦の大火以後に人々の努力によって作り上げられたものです。日野商人は、商家の旦那として幅広く高い教養を身につけ、国学・心学、絵画、和歌、俳諧、能、生花など多岐にわたる分野で関東の文化人や武家と交流を重ねる中で独自の文化を育み、地域文化の発展に貢献しました。大窪出身の商人であった高田敬輔は、狩野永敬に画技を学んだのち京・江戸で絵師として活躍、信楽院本堂の天井画をはじめ数多くの作品を制作するとともに、島崎雲圃・月岡雪鼎・谷田輔長・高田敬徳等、多くの門人を育てました。文化・文政期には、日野商人や仁正寺藩の学者を中心に『蒲生旧趾考』をはじめとする地誌を編さんするなど、地域の歴史の顕彰活動が活発化しました。

高田敬輔（島崎雲圃筆）

地域の安定と発展を受けて、町内各地では神社や寺院の再建・建立が相次ぎました。戦国の争乱で荒廃していた正明寺は、後水尾上皇からの寄進を受けて再建を果たし、黄檗宗の

高僧龍渓性潜を招き黄檗宗寺院として再出発しました。また、馬見岡綿向神社の春の例大祭である日野祭に巡行する絢爛豪華な曳山は、江戸時代中期から後期に建造されたもので、日野商人や町衆の財力と文化力の高さを示しています。

(4)近代・現代

（近代）

町域は、明治政府による廃藩置県で大津県に属し、その後いくつかの変遷を経て明治５（1872）年に滋賀県に編入されました。江戸時代に 55 あった町村は、明治 22（1889）年の町村制により、日野町・桜谷村・西大路村・鎌掛村・南比都佐村・北比都佐村の１町５村に区分され、明治 27（1894）年には桜谷村が東桜谷村と西桜谷村に分離して１町６村となりました。近世の町村は大字となり、町村行政の補助単位であるとともに、住民の生活単位となりました。

啓迪学校

教育では、明治６（1873）年の啓迪学校・朝陽学校・正研学校を皮切りとして町内各地に学校が設立されました。明治 22（1889）年の町村分合以降、大正年間までに日野・東桜谷・西桜谷・西大路・鎌掛・比都佐（南比都佐）・必佐に尋常高等小学校が整備され、現在の小学校の基盤ができました。明治 38（1905）年には日野町立裁縫学校を設置し、女子を対象とした教育の充実を図りました。明治 42（1909）年には日野町立日野女子手芸学校を開校、同校は滋賀県日野高等女学校を経て、昭和 23（1948）年に滋賀県立日野高等学校となり現在に至っています。

農業は、米作を主とし、明治時代中期から大正時代にかけて、ため池整備、河川改修、隧道建設を伴う耕地整理事業が行われ、旱害や水害などの災害に強い農業基盤が整備されました。

江戸時代に他国稼ぎで財をなした日野商人は、明治 18（1885）年に江州日野商人組合を結成するとともに、明治 22（1889）年に日野結城会社、明治 23（1890）年に日野製糸会社、明治 29（1896）年に株式会社日野銀行、大正３（1914）年に江州日野製剤株式会社等、新たな会社や金融機関を次々と設立し、近代に入っても地域経済をけん引しました。

谷出山隧（下駒月）

交通面でも、日野商人の主導で明治 33（1900）年に近江鉄道八日市－日野間が開通、翌 34（1901）年には日野－貴生川間が開通しました。また大正 10（1921）年には、日野駅前に綿向自動車株式会社が設立され、新たな交通手段としてバス路線が整備されました。これら新しい交通体系の整備により、移動・輸送の利便性が劇的に向上しました。

日野駅（近江鉄道）

生活面では、明治時代末期から大正時代にかけて、電話や電灯が登場するなど便利な暮らしが広がりました。また、明治 39（1906）年に一般向け図書館である日野文庫が開館、明治 42（1909）年に地域新聞『日野新聞』と『日渓時報』が創刊、明治時代末期から昭和時代初期に史蹟（しせき）名勝の保存運動が活発化、大正８（1919）年に蒲生氏郷公銅像を建設等、様々な文化活動を展開しました。

日野文庫関係資料

明治から昭和戦前期に至る 80 年間は、対外戦争の時代でもありました。とりわけ、昭和 12（1937）年に日中戦争が始まると、当町からも出征兵が激増し、アジア・太平洋戦争までに 900 人以上の兵士が犠牲になりました。あらゆる物資が不足し、学校の校庭では農作業が行われ、武器に必要な金属は回収されたため寺院の梵鐘（ぼんしょう）や地域のシンボルである蒲生氏郷の銅像も供出を余儀なくされました。昭和 19（1944）年からは大阪市の国民学校児童の疎開受け入れが始まるなど敗戦色が濃厚となり、翌 20（1945）年に終戦を迎えました。

（現代）

昭和 28（1953）年の町村合併促進法に基づく全国的な町村合併の流れの中、昭和 30（1955）年３月 16 日に１町６村が合併し、現在の日野町が誕生しました。

合併後の昭和 30 年代から 40 年代は日本が高度経済成長を遂げ、近代化・工業化が進んだ時代でした。当町においても、小学校・幼稚園の校園舎、プール、体育館等の整備、日野中学校の統合・新校舎建設、上水道・簡易水道や福祉施設の整備を進め、教育・衛生・福祉環境の充実を図りました。

新日野町の開庁式

農業では、昭和 49（1974）年からは圃場整備事業に着手し、農地の区画整理や用水・排水路、農道の整備が進みました。また、昭和 41（1966）年に完成した日野川ダムや、平成６（1994）年に完成した蔵王ダムによって治水・水利環境が整い、効率的で安定した米作が可能となりました。

工業では、昭和 49（1974）年の日野住宅工業団地（のち日野第一工業団地（大谷））造成、昭和 60（1985）年の日野第二工業団地（北脇・奥之池）造成を契機に企業立地が進み、地域経済の振興と雇用の創出を図りました。

観光では、関西・中京の大都市圏に隣接した立地と自然環境を活かした観光開発が盛んに行われ、昭和 47（1972）年に開場した日野ゴルフ倶楽部（杣）を皮切りに３つのゴルフ場が整備されました。また、平成９（1997）年には滋賀農業公園ブルーメの丘（西大路）、平成 12（2000）年にはグリム冒険の森（熊野）を整備し、観光振興を図りました。

公共施設の整備では、昭和 50 年代以降、昭和 54（1979）年に日野町林業センター、昭和 54（1979）年から翌 55 年にかけて大谷公園（大谷）、昭和 55（1980）年に役場庁舎（河原）、昭和 56（1981）年に日野町歴史民俗資料館近江日野商人館（大窪）、昭和 60（1985）年に日野中央病院（現、日野記念病院（上野田））、平成５（1993）年に日野町町民会館わたむきホール虹（松尾）、平成８（1996）年に日野町立図書館（松尾）、平成 17（2005）年に日野まちかど感応館（村井）、平成 27（2015）年に近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」（西大路）等の施設整備が進み、町民の暮らしは大きく向上しました。

社会教育では、心豊かで活力に満ちた人づくり・地域づくりの拠点として公民館を全７地区に設置し、昭和 63（1988）年から平成 13（2001）年にかけてすべての公民館を改築しました。各公民館では、「集う」、「学ぶ」、「つなぐ」を合言葉に、住民自らが組織した実行委員会を中心として地区の個性を活かした自主事業が活発に行われています。

また、自主防犯・防災、学校ボランティア、日野ひなまつり紀行等、住民主体のまちづくりが展開されています。

令和３（2021）年に第６次日野町総合計画を策定し、「時代の変化に対応し だれもが輝き ともに創るまち“日野”」をめざしたまちづくりを進めています。

日野町町民会館わたむきホール虹（松尾）

(5)災害史

（風水害）

当町は降水量が少なく温和な気候ですが、かつては鈴鹿山脈に多くの雨が降ると、急峻な渓谷を流れて日野川・佐久良川へと注ぐために、平野部では河川の氾濫などの災害が引き起こされてきました。

明確な記録が残る大きな水害として明治 29（1896）年９月の豪雨による洪水があり、全半壊した家屋 101 棟、破損 562 棟、流失 17 棟の被害が出ました。また、大正２（1913）年 10 月の台風では、佐久良川が決壊したほか、19 か所の橋梁が流出または陥落し、道路も 30 か所で決壊しました。さらに、昭和 34（1959）年９月の伊勢湾台風では日野警察署管内で、死者１人、家屋の全壊４戸、半壊８戸、流失１戸のほか、堤防が 10 か所で決壊し、山崩れが 24 か所で発生しました。

その後も、昭和 40（1965）年９月の台風 24 号など、数度にわたる台風により発生した風水害で被害が出ています。

（大火）

近世、木造家屋が密集する町場においては火災が脅威となりました。

日野の町場も、宝暦６（1756）年 12 月 18 日に発生した火災が強風で広がり、村井、大窪、松尾で 1,000 軒以上の家屋や９か所の寺院など、町場の大半が焼失しました。当時の様子は「宝暦の大火」として語り継がれ、火伏せ信仰の愛宕神社を崇敬する愛宕講が各町で組織され、多数の愛宕護符神塔が建てられました。

また、明治 17（1884）年５月 24 日に猫田で発生した火災は強風で十禅師にまで広がり、約 90 軒の家屋と比都佐神社本殿等が焼失しました。圓融寺（猫田）には、「猫十の大火」といわれたこの時の大火の様子を伝える石碑があります。

（地震）

当町では、近年大きな被害が出た地震は発生していません。嘉永７（1854）年６月に伊賀上野（伊賀市）を中心に発生した地震により 300 軒以上の家屋が倒壊したことが記録に残ります。

また、五斗井遺跡（河原）の発掘調査により、寛文２（1662）年あるいは文政２（1819）年の大地震の痕跡と考えられる断層や噴砂、地割れが確認されています。

日野町の主な災害史

年月	要因	被害状況等
宝暦６（1756）年 12 月	大火	「日野焼け」ともいう大火災。12 月 18 日の大火により日野の町場は、甚大な被害を受ける。強風により被害が拡大。計 1,061 軒の家屋、９か寺が灰燼に帰す。
明和７（1770）年６月	大旱魃	大旱魃で数日間にわたる雨乞い神事が馬見岡綿向神社で行われ、日枝神社・井林神社などで多くの「幟」が奉納。
文化４（1807）年５月	洪水	日野川右岸の中山村の堤防が決壊し、中山・増田村の田地が浸水。
文政４（1821）年８月	大風雨	出雲川（大井）の留口が破損。
嘉永６（1853）年	旱魃	—
嘉永７（1854）年６月	伊賀上野地震	伊賀上野を震源としたM7.3 の地震。日野でも死者・家屋の倒壊・火災の発生など大きな被害が出る。余震も断続的に発生。特に鎌掛村が被害大。
安政２（1855）年８月	洪水	出雲川の井堰が流される。
明治 16（1883）年７月以降	旱魃	明治時代最大の旱魃。100 日以上干天が続く。凶作となる。
明治 17（1884）年５月	大火	24 日発生。激しい西風で猫田村から十禅師村に飛び火し、両村で家屋 89 戸や空善寺本堂、比都佐神社本殿等が焼失。
明治 18（1885）年７月	暴風雨	日野川筋で家屋流失・破損、田畑流失、佐久良川筋で家屋流失・破損、田畑流失、砂川筋で家屋破損、田畑流失、堤防決壊。
明治 26（1893）年６月以降	旱魃	田の用水が枯渇し、稲苗が枯死。60 日以上雨が降らず。
明治 29（1896）年７～８月	大雨	佐久良川・出雲川の支流・日野川が増水し、出水の被害。
明治 29（1896）年９月	豪雨	９月３日から 12 日まで雨が降り続き、日野町付近の平野部で降水量が 700～800mm、山地では 900mmとなる。日野川・佐久良川筋の堤防が決壊したことにより町域で大災害。ため池の崩壊・山崩れ。鎌掛村のすべての橋が流失。砂川の氾濫。
大正２（1913）年	旱魃	未曾有の旱魃といわれる。
大正２（1913）年 10 月	台風	佐久良川の一部が決壊、ほか日野川・北砂川を含めて橋梁は 19 か所流失、道路は 30 か所欠損、死者１人・家屋流失崩壊・浸水など。
大正 13（1924）年	旱魃	大旱魃。
昭和２（1927）年	旱魃	大旱魃。
昭和９（1934）年９月	室戸台風	住家・工場・寺社・学校の半壊、電信・電話線・電気電力柱が切断されるなどの被害。
昭和 12（1937）年	旱魃	大旱魃。
昭和 14（1939）年	旱魃	大旱魃。
昭和 28（1953）年９月	台風 13 号	台風 13 号による 23 日からの降水量は、町域の平野部で 200mm、山地で 250～300mmに達する。日野川の水位が危険水位を 90ｃｍも上回るなど町域で河川の氾濫や堤防の決壊が起こる。特に被害の著しかった西大路村・東桜谷村・鎌掛村・北比都佐村に災害救助法が適用。木津での被害体験の記録が残る。
昭和 33（1958）年８月	台風 17 号	橋梁・河川氾濫・耕地災害。
昭和 34（1959）年８月	台風７号	豪雨被害。家屋浸水、道路護岸流失、橋梁が損壊し、孤立集落ができる。死者１人。
昭和 34（1959）年９月	伊勢湾台風	豪雨と風速 30～40mの暴風被害。家屋全半壊、堤防決壊、山崩れ、水田の冠水。死者１人。日野川流域で河川が氾濫広範囲に浸水。橋・道路の流失で東桜谷・鎌掛地区は不通となる。
昭和 36（1961）年９月	第二室戸台風	降水量が少なかったため河川の氾濫はなく、家屋の全半壊や一部損壊などと軽傷者のみ。
昭和 40（1965）年９月	台風 24 号	大雨による水害。町域の平地で 350～400、山地で 400～450mm。河川の堤防決壊や氾濫。家屋の全半壊・浸水、耕地の流失や埋崩壊、道路や橋梁の被害。
昭和 47（1972）年９月	台風 20 号	平野部で 200mm、山地で 200～300mmの降雨量。家屋一部損壊、床下浸水、道路崩壊、河川護岸崩壊、山林崩壊。砂川・出雲川でも被害。
昭和 49（1974）年７月	低気圧	集中豪雨。熊野で 223mmを観測。床上・床下浸水、道路破損、河川破損、水路に被害。